通わせたい学校

厚切りジェイソン著「日本のみなさんにお伝えしたい 48 の Why」を手にしました。仕事や学業，人間関係など，日本人から寄せられた日常の様々な疑問に対し，彼ならではのポジティブな考え方で回答したものです。行間からは“日本人，なんでぇ！”の思いが垣間見えます。そのジェイソン氏，自分の子どもを日本の学校に通わせるか否か悩んでいたようです。次のように記してありました。

「子供たちには，まさにこの本で僕が言っているような人間になってもらいたい。自分で考えて，自分の意見を言えて，その意見をちゃんと論理的に説明でき，自ら仮説を立てて，分析ができる人。途中でへこたれない根性があって，他人の目に惑わされない。（略）このままいけば，長女も次女も日本で学校に通うこととなる。でも僕は，必要なことが日本の教育で足りるかどうか，心配だ。僕がなってほしいと願う『自分で考える人間』は，日本の学校では教えてくれないことだから。」

彼にこう言われて，学校教育に身を置く者としてどう感じられますか。「何言ってるんだジェイソン，日本の小・中学校でも教えているよ。」そう思い，書籍の発行年を見ると 2015 年，現行学習指導要領の改訂よりも前に著されたものでした。

確かにかつて，我が国の学校教育は，社会の求めに応じて知識や技能の一斉伝達に重きが置かれ，どれだけ知っているかで評価していました。時は流れて，現代は創造力や伝える力，協働性，逞しさ等を身に付けた人づくりが重視され，将来この傾向が更に強まるであろうことは想像に難くありません。現行学習指導要領が「主体的，対話的で深い学び」を標榜しているのは，当然の帰着と思えます。

ところが，2022 年度全国学力学習状況調査（児童生徒質問紙調査）結果では，「課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいたと思う」児童の割合が，2017 年をピークに減少傾向を示しています。また，「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりできている」は，改善傾向にあるとはいえ未だ８人に１人の生徒が否定的です。データは持ち合わせていませんが，知的能力が高い児童生徒ほどその傾向が強いのではないでしょうか。

学習課題の吟味やそれを学び手のものとする過程の在り方，考えを練り上げる話し合いや深い学びに至らせる問い返し等々について，さらに研究を深めていきましょう。主体的・対話的で深い学びは，子ども達にとっても日本社会にとっても，将来に欠かせない大切な資質・能力を育成します。個の幸せと日本の発展のために，それを全ての学校のどの教室でも実現しなければなりません。成否は，学校教育に携わる私たちの手に委ねられているのです。

ジェイソン氏は今，子ども達を日本の学校に通わせているのでしょうか。将来を逞しく生き抜く力を育む教育を，今の日本の学校に認めているでしょうか。聞いてみたいものです。

東蒲・五泉支部　副支部長　　渡邊　　誠